

英文学的アクティブ・ラーニングの極意

阿部公彦

英文学史の授業で、今流行のアクティブ・ラーニングを取り入れたいと思っている。考えたのは「裏英文学史」。授業で習う文学史はもちろん覚えてもらった上で、自分なりの英文学史・裏ヴァージョンを考案してもらうのである。

まず作品タイトル、それに粗筋もつけてもらおうと勉強になりそうだ。以下のように。

『ロビンソン、苦しそう』by ダニエル・デ

『ロビンソン・クルーソー』の海賊版。冒頭部しか再録していないひどいもので、船が難破して主人公が溺れそうなどころで終わってしまうため、何の話かわからず、いつしかこう呼ばれるようになった。

『ダニエル、出るんだ!』by ジョージ・エ

主人公のダニエルは「トイレ・テロリスト」。小型飛行機に

一つしかないトイレに立てこもり、乗客たちを恐怖と不安に陥れる。近年危険性が増している犯罪を活写する社会派小説。
『理由なきハンコ』by ニコラス・レ

老教授田所ころ太は、いつも書類にハンコを押すのを忘れるため、事務職員たちに「ハンコジジイ」と呼ばれいじめられていたが、ついにある日、「書類にはハンコが多すぎる!」と声をあげる。

もちろんハードルが高すぎてもいけない。粗筋を考案するの
がたいへんなら、まずはタイトルだけでいい。たとえば『ジェ
ンは屁や』by シャーロット・ぶ、『ぶびきと怒り』by ウィリア
ム・ふ、『くマ』by ジェーン・え、『禿げとともに剃りぬ』by
マーガレット・み、など。なお、一般にアイデアを公募したところ、
以下のようなものが集まった。『肥満児』by ナサニエル・ほ。
『あれ、血』by T・S・え。『おでんの東』by ジョン・す。『日
陰者(重度)』by トマス・は。『サメロ』by オスカー・わ。『私
と話さないで』by カズオ・い。今後、こうしたアクティブ・
ラーニングの輪が広がっていくことを期待する。(東京大学教授)